

<b>経済産業大臣賞</b>  「事業所・地方公共団体等」分野	受賞者名
	<b>日本シイエムケイ株式会社 新潟サテライト工場</b>
	所在地
	<b>新潟県北蒲原郡</b>
	受賞テーマ
	<b>プリント配線板製造工場から発生する産業廃棄物の排出抑制</b>

同社は、1999 年に ISO14001 の認証取得を目指し、本格的に工場から排出される産業廃棄物の排出抑制の取り組みを開始した。社内の環境専門部会の一つである省資源・リサイクル部会を中心とし、産廃業者の協力を得ながら廃棄物の細分別活動、社員教育活動により 2005 年度にはゼロエミッション率（埋立て廃棄物「ゼロ」）100%を達成した。又、定期的に省資源・リサイクル月間のポスターを掲示し、リサイクル推進活動を全社員へアピールし、社員の 3 R の意識向上に努めている。

社外への展開も活発に行い、聖籠町環境展（2002 年）、国際環境ビジネス展（2003 年）にリサイクル推進活動を出展、環境雑誌日経エコロジーへの投稿（2006 年）、この投稿が採用され、日経 B P 社主催の環境推進活動に関する講演及びパネルディスカッションのパネラーとして対応（2007 年）、更に新潟総合テレビでリサイクル推進活動の取材を受け、テレビ放映（2008 年）された。

1999 年当時の産業廃棄物（特管含む）委託処理量は年間 4,847t で廃プラ 1,471t、工程廃液 1,342t、フィルム剥離カス汚泥 208t であり、この 3 種類で総排出量の 62%以上を占めていた。廃プラはビニール系を圧縮化、細分別の徹底によるリサイクル化及び有価物への転換、インク容器の大型化及びメーカーとの通い方式に切り替え等を行った。工程廃液は 15 種類の廃液のうち 7 種類を自社処理していたが全廃液の自社処理化を目指し活動を開始した。廃液を混ぜるバランスを順次調整、又、生物処理を確立し、2010 年度には 1 種類を残すのみとなった。フィルム剥離カス汚泥は自社で中和・脱水処理可能かを試行錯誤し、処理施設を導入し、委託処理量を大幅に削減した。（2010 年度の排出量 127t）

**工場廃液の自社処理化による委託処分量の削減**

自社処理化にあたり外部業者からの設備導入か自社案（処理コスト安価）かで検討。実験結果から生物処理が可能と判断し、取組を始めた。成功のキーポイントは以下の 4 点である。

- ①鉄液置換法の処理条件確立
- ②現像・剥離の廃液と混合条件の確立
- ③各廃液系統の制御連動化による水質の安定化
- ④生物処理の微生物強化成功

